令和元年度教育事業　夢冒険
真夏にチャレンジ　～『∞』の一歩～

１．ねらい

①日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感を感じとらせ、自己肯定感を高めさせる。
②基本的生活習慣を確立させる。また、規範意識を高めさせる。
③異年齢での集団行動を通じて、仲間と協力する気持ちを培わせる。
④基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で、生きるために必要な知識・技能を養い、主体的に考えて状況判断をし、危機管理できる能力を身につけさせる。
⑤自然の雄大さやすばらしさに気づき、視野を広げさせる。

２．実施日

令和元年８月１７日(土)～８月２４日(土) ７泊８日

３．対象者

小学校５・６年生、中学生

４．参加者 ／ 募集定員

２４名／２４名

５．プログラム（要約）

４年目を迎えた曽爾から伊勢まで「歩く」移動型キャンプ。新たな内容や活動を加え、『∞』の一歩をテーマに、曽爾から伊勢まで続く道を辿り、そこにある「自然」「人」「歴史」を五感で感じ、自分たちの「足」で仲間とともに様々な困難を乗り越えながら、約１００㎞の道のりを移動した。曽爾青少年自然の家から三重県にある伊勢神宮を経由して、二見の海を最終目的地とした。「歩いて曽爾（山）から二見（海）を目指す」という大きな目標の達成に向け、新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、その日ごとのねらいをしっかりと設定すると共に、歩く活動の他にテント設営・撤収・野外調理や洗濯など様々な体験活動を盛り込み、仲間と共に協力する場面、自分自身の力を発揮する場面を設けた。また、街道沿いに残る道標や灯篭、宿場町の街並みにも目を向け、お伊勢参りの歴史や意味について学ぶ機会を設け、歩くことを通して様々なことを考え感じることができるプログラムとした。

スケジュール

日	主なスケジュール	距離（約）
１７日	★はじめまして	
	国立曽爾青少年自然の家（集合） 真夏にチャレンジはじまりの会 目標設定 テント設営・野外炊事（ちゃんこ鍋） 夢冒険ＴＩＭＥ（目標発表）	
	【宿】国立曽爾青少年自然の家 （奈良県宇陀郡曽爾村）	テント
１８日	★いっぱい話して、もっと知ろう！	
	自然の家⇒伊勢地体育館 歴史探訪ラリー（御杖村） 夕食作り（麻婆茄子） 夢冒険ＴＩＭＥ（自己紹介ゲーム）	１４㎞
	【宿】伊勢地体育館 （三重県津市美杉町）	テント
１９日	★限界に挑戦！	
	伊勢地体育館⇒リバーサイド茶倉 伊勢本街道の難所を踏破 夕食作り（回鍋肉） 夢冒険ＴＩＭＥ（家族への手紙）	２４㎞
	【宿】リバーサイド茶倉 （三重県松阪市飯南町）	バンガロー
２０日	★仲間っていいな！	
	リバーサイド茶倉⇒ふれあいの森勢山荘 夕食作り（カレーパーティ） 夢冒険ＴＩＭＥ(友だちのキラリ)	１１㎞
	【宿】ふれあいの森　勢山荘 （三重県多気郡多気町）	テント
２１日	★友だちいっぱい、笑顔いっぱい！	
	勢山荘⇒五桂池ふるさと村 班で食材の買い物 夕食作り（夏野菜すき焼き）	８㎞
	【宿】五桂池ふるさと村 （三重県多気郡多気町）	バンガロー
	五桂池ふるさと村⇒伊勢神宮（外宮） ⇒修養団 ≪夜間歩行≫	２１㎞
２２日	★仲間を見つめる、自分を見つめる	
	修養団到着	
	内宮参拝 伊勢散策（おかげ横丁） 夕食作り（食事コンテスト） 夢冒険ＴＩＭＥ（大川柳大会）	３㎞
	【宿】修養団伊勢青少年研修センター （伊勢市宇治今在家町）	本館
２３日	★海へ～何が見えるだろう～	
	修養団⇒二見輿玉神社 二見⇒自然の家（バスで移動） グループＴＩＭＥ（スタンツ練習） 夢冒険TIME（キャンドルファイアー）	１２㎞
	【宿】国立曽爾青少年自然の家 （奈良県宇陀郡曽爾村）	本館
２４日	★すべてに感謝！来た時よりも美しく	
	道具の片付け グループＴＩＭＥ（振り返り・冬までにがんばること） 真夏にチャレンジ終わりの会 解散	
冬の「夢冒険」へつづく		

８月１７日（土）【１日目】

奈良、大阪、三重から、小学生１３名、中学生１１名の計２４名が曽爾青少年自然の家に集まった。不安と期待を胸に、７泊８日共に活動を行う異年齢男女混合の１班６名の４班で、「夢冒険」真夏にチャレンジがスタートした。

午前中に開会式、オリエンテーションなどを行い、昼食を食堂で済ませ、午後から本格的な活動が始まった。

午後１時、日差しの照り付けるはつらつ広場に集合して、これから一週間班で使う生活道具一式（班セット）の内容と数の確認、テントの取り扱いの説明を受けた後、班での活動が始まる。

夢冒険では、一日の終わりに行う「夢冒険TIME」までの時間の使い方は、班で相談して、洗濯、テント設営、食事の準備、入浴などを行う。また、起床時間や朝食の時間も「出発のつどい」の時間から逆算して、班で相談して決める。参加者が、自分たちで考えて、自主的・主体的に活動することを大切にした。また、職員やボランティアは、参加者が知らないことや初めて行うことは、丁寧に説明をして指導をするが、参加者ができることは、全て班で相談して仲間と協力して行えるように活動のサポートをすることに徹した。

まずは、テント設営。各班７人用と５人用の２つのテントを建てた。「どこに建てよう」「トイレの近いところがいいなぁ」「少しでも日陰の方が涼しいね」「こっち景色もいいし、風通しもいいからここにしよう」はつらつ広場にテントの花が開いた。緊張気味であった参加者も活動をしながら、班のメンバーとも打ち解けてきた。夕食作りも各班のペースで始まり、炊事場所もはつらつ広場と本館炊飯場に分かれた。ちゃんこ鍋の食材を受け取り、各班で調理に取り掛かった。「参加者６名とリーダーさん２名と職員さん２名の１０人分だね」「どれ位ご飯を食べるかなあ」「一人１合位？」「無理無理、食べきれないよ」「全部で５合？」「もうちょっと少なくていいかなぁ」「４合？」「４．５合にしようか」というような話し合いのもと炊くお米の量が各班で決定した。また、材料の豚肉、野菜、肉団子などを見て、メニューも相談した。「炊き込みご飯にしようよ」「豚肉の生姜焼きもいいよね」「豚汁と野菜炒めにしよう」などそれぞれの班で調理を楽しんだ。お米の計量を間違えたり水加減を誤ったりしてご飯を炊くのに失敗した班もあったが、テントを建てて野外炊事を一緒に行うことによって、班のなかまと打ち解けることができ、２日目からの厳しい挑戦に向けていい準備ができた。

夜の夢冒険TIMEでは、歩く行程を地図で確認したり、長時間歩くコツ、休憩の取り方や水分補給、補食での栄養補給の心得を学んだりした。

８月１８日（日）【２日目】

晴天のもとはつらつ広場で子どもたちの司会・進行による「出発のつどい」を行い、いよいよスタート。全員の顔に、「よし、がんばるぞ」という気持ちが表れていた。

御杖村に入ると、道標や灯篭・お地蔵さんなどについて調べながら歩いた。

丸山公園での昼食後、気温はどんどん上昇して、子どもたちの体力を一気に奪った。しかし、「あの日陰で休憩をとろう」「体育館まで残り１キロだよ」とみんなで声を掛け合い、励まし合って全員が笑顔で伊勢地体育館に到着した。初日の歩行を終え、班の結束力は一気に高まった。

簡易シャワーを浴びた後、各自で夢冒険のポロシャツを手洗いした。「自分でできることは、進んで自分でする」ということが夢冒険の大きなねらいの一つで、洗濯もその一環である。初めて手洗いをするという子も多く、ポロシャツをきつく絞ることに苦労していた。家で家族に洗濯をしてもらうことや洗濯機のありがたさを改めて感じていたようである。

２日目の夕食のメニューは、麻婆茄子とサラダ。「ぼく、ご飯炊くよ」「私サラダのドレッシング作るね」「茄

子はどうやって切る？」それぞれが何らかの担当を受け持ち、炊事が始まる。ご飯を炊く量は、１日目の反省をもとに「昨日は、少し多かったので４合でいいね」「今日は、たくさん歩いてお腹が空いたから、昨日より多めに炊こう」という声や、だし、ごま油、オリーブ油、スパイス、お酢などの調味料を使い、「もう少し辛くしよう」「とってもおいしい」と楽しそうにドレッシングを自作する姿が見られた。この夕食づくりが、一日の中で一番ホッとできる時間かもしれない。

夢冒険 TIME では、「自己紹介ゲーム～ダウトを探せ！」をして、お互いの得意なこと・好きなことなどをクイズ形式で発表し合い盛り上がった。午後７時３０分、翌日の長距離歩行に備え、早めにテントに入った。

８月１９日（月）【３日目】

まだ月が煌々と輝く真夜中３時、自分たちでセットした目覚まし時計で起き、テント内に灯りがともり始めた。まず、寝袋やマットを片づけて、次に、自分の荷物の整理、それが終わると、テント内の荷物を運び出す。街灯の灯りだけで、テントを撤収し朝食を済ませ、最後に班ごとの装備や大きなカバンをトラックに積み込む。午前５時１５分の出発のつどいに全員が遅れずに集合した。「時間を守る」これは、みんなで守る３つの約束事のうちの一つである。

つどいでは、「みんなでがんばって２４km を歩き切りたいです」「班のみんなといっぱい話して楽しく歩きたいです」などと、自分の目標を発表した。最後に全員で円陣を組み、「みんなで２４km 歩き切るぞ！」「おー！」でスタートを切った。

うす暗く、人気のないのどかな田園地帯を歩き始める。知り合って３日目だが、もうずっと昔から知り合いだったかのような雰囲気がどの班にも感じられた。８日間の日程でこの日が一番長い距離を歩く。しかも難所の峠を２つ越える。子どもたちの顔も「よし、やるぞ！」「がんばるぞ！」と気合いに満ちていた。どの班も午前中の比較的涼しい時間帯に距離を稼ぐことを目標に歩き始めた。歩く速さや並び方、休憩の取り方については中学生のリーダーが中心となって班で相談をして決めていた。

歩くルートはタブレット端末によるマップの画面と紙の地図を併用して確認した。疲れてきたら歌を歌ったり、ゲームをしたり、クイズを出し合ったりして気持ちを紛らわせて２～３km 先の休憩ポイントを目標にして歩いた。飼坂峠は、伊勢本街道の難所の一つで、大変急な山道である。足元に注意しながら一歩一歩足を進めた。１日目の歩行では、一回の休憩時間が長すぎたことで余計に体力を消耗した。そこで２日目の歩行では、休憩時間は、どの班もできるだけ短時間にするように工夫した。短時間ではあるが、必ず水分補給と行動食でエネルギー補給を心がけた。また、昼食のおにぎりも一度に３個全部を食べるのではなく、ちょっとずつ食べることを推奨した。お昼からは、班によって歩くペースに大きな差が出て、到着時刻が大きく開いたが、全員が夕方までに、宿泊場所のリバーサイド茶倉に到着することができた。

夕食のメニューは、回鍋肉とわかめスープとスイカ。途中激しい雷雨に見舞われたが、準備も片付けも手慣れた様子でチームワークよく行った。２４km を歩き切ったことは、班としても個人としても大きな自信となった。全員が、「この調子でがんばれば、絶対にみんなで１００km を歩き切ることができる」という気持ちを持つことができた。

夢冒険 TIME では、家族への手紙を書いた。出発してまだ３日目だが、３日間が充実していたため、家を出たのがずっと前のことに感じたのではないだろうか。「たくさん友だちができて楽しくやっているよ」「今日、２４km を歩いたよ」「毎日、自分たちでご飯を作っているよ」などと、近況を報告したり、「早く家に帰って、お母さんが作った料理を食べたい」「お土産を買って帰る」と書いたり、家族のことを思い出しながら、集中して筆を走らせていた。

８月２０日（火）【４日目】

午前５時過ぎから目を覚まし、活動を始めた。今朝はゆったりとした朝の時間を過ごす。誰でもセルフサービスでココアや紅茶、コーヒーを入れて飲むことができるコーナーが設置しているので、好きな飲み物を飲みながら、おしゃべりを楽しんでいた。日常を忘れ、キャンプ生活にどっぷりと漬かる。「今日は、何日目だろう？」という会話もあった。

木漏れ日の中でサンドイッチを作り、班でたわいもない話をしながら食卓を囲む。家族の団らんのような幸せを感じるひとときを過ごした。

午前８時、すべての班が余裕をもって集合して、出発のつどいが始まる。さぁ、今日の闘いが始まる。４日目は、午前中に８㎞を歩いて、お昼は河原で少し水遊び、午後に３㎞ を歩き勢山荘が本日のゴール。「たった１１㎞楽勝だね」。２４㎞を歩いた後は、自分自身への自信から、心にも体にも余裕が表れる。

しかし、夢冒険には様々な試練が潜んでいる。この日は、強烈な日差しと暑さが参加者を苦しめた。前日までは、山間部の木陰を歩くことが多かったので、暑さに対して嫌悪感を抱くことは少なかったが、４日目からは、太陽が照り付ける単調なアスファルトの道を歩くことが多く、適切な水分・栄養補給がより大切となった。また、歩きながら班で言葉遊びゲームをしたり歌を歌ったりといった歩き方の工夫も重要になってくる。どの班もお互いに励まし合いながら、勢山荘を目指した。

途中、昼食場所の河原では、裸足になって足を川の水で冷やしたり、水切りを楽しんだりした。昼過ぎに全員が自分の足で無事勢山荘にゴールした。

夜の夢冒険 TIME の集合までは、班で時間を考えて過ごす。４日目になるとお互いの遠慮が減り、個々の甘えや我儘も徐々に出てくる。ありのままの自分をさらけ出すことができるようになったともいえる。また、身体的な疲れや家族に会えない寂しさからくるストレスを訴える様子も出てきた。テントをどこに建てるか、入浴の時間は何時からにするか、絵日記にはどんなことを書くか、意見がまとまらなかったり、些細なことで衝突が生まれたりもした。班のリーダー（中学生）が悩み始めたのもこの頃からである。この状況を乗り越えれば、集団としてさらにもう一段階成長することが可能なのだが・・・。職員やボランティアは、子どもたちの成長を信じて、優しく見守った。

夕食は、カレー。様々な調味料で味にアレンジが加えられ、同じ材料を使ってもカレーの味は様々だった。

午後７時、夢冒険 TIME。日々の終わりの会で行っている「友だちのキラリ」の拡大版として、沢山のなかまにキラリカードを書いた。職員やボランティアも参加して、友だちのいいところ、がんばっているところ、してもらってうれしかったことを付箋に書いて、相手に伝えた。みんな、友だちからのキラリカードを嬉しそうに読んだ。午後８時３０分、全員テントに入り寝た。

８月２１日（水）【５日目】

夢冒険も後半戦に突入。午前６時頃から、早起きの子どもたちは活動を始めた。今朝も快晴。夜露で濡れたテントをしっかりと乾かしてきれいに畳んだ。

５日目の出発のつどいは、８日間で一番遅い午前９時。歩く距離は、僅か８㎞であったが、一緒に歩くメンバーをこの日は変更し、心身共にリフレッシュすることをねらいに据えた。

男子の中学生班と小学生班、女子の中学生が中心の班と小学生班に分かれて歩いた。中学生にとって、班の運営に関する悩みを出し合ったり、情報交換したりするいい機会となった。また同学年の友だちとたくさん話をすることにより気持ちをリフレッシュするとともに、班の仲間以外の横のつながりを深めることができた。これが、夢冒険の後半の活動に大きく生きてきた。

お昼に五桂池ふるさと村に到着し、午後は、班で相談して地元野菜を扱う産地直売所で夕食の食材などを購入した。夕食は牛肉とネギ、とうふ以外の食材は、自分たちで購入して、すき焼きや牛丼、炊き込みご飯、牛肉の炒め物などを班で工夫して作った。早めの夕食を終え、夜間歩行に備えて午後６時３０分に床に就いた。

８月２２日（木）【６日目】

起床午前１時。寝具を片づけ、荷物の整理をして、すぐに全員が荷物を積み込むトラックの前に集合した。

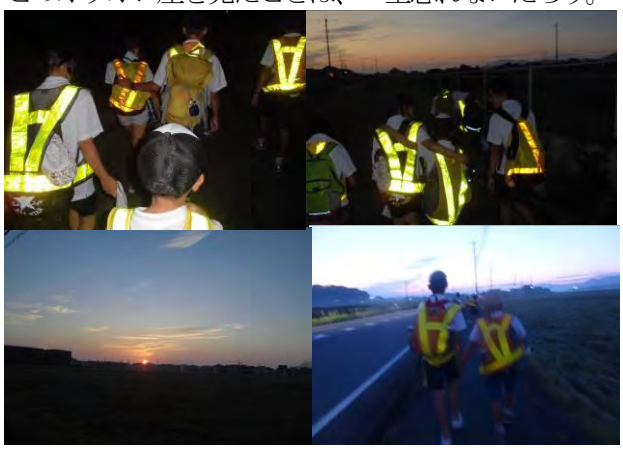
午前２時、真夜中の出発のつどい。反射ベストを着用して、頭にはヘッドライトを装着。気合いも十分。司会の「がんばって、伊勢まで２１㎞を歩くぞー」の掛け声のもと、全員が元気に出発。

街灯はほとんどなく、真っ暗な田舎の道を歩く。聞こえるのは、カエルの合唱と虫の声。

「夜間歩行とても楽しみやってん」「夜って気持ちいい」「夜中に歩くの初めてだ」みんな少しハイテンションだ。涼しいので、歩くペースもいい。約１時間に１回の休憩を取りながら順調に進んだ。夜間の休憩場所は、必然的にコンビニとなった。トイレ休憩だけでなく、必要に応じて、各自で行動食や朝食を購入した。

タブレット端末に次に休憩する場所を入力し、コースを確認して出発。

「あれ、オリオン座と違う？」「あっ、ホントだ」「へぇ、夏なのにオリオン座が見えるんだね」午前３時３０分、真正面に、きれいなオリオン座を見つけた。冬の星座だが、南東の方角に見ることができた。きっとこのオリオン座を見たことは、一生忘れないだろう。



４時過ぎからだんだん空が明るくなり始める。田んぼに朝靄がかかり、幻想的な景色だ。「あと１㎞でコンビニがあるからもう少しがんばろう」。コンビニでトイレを済ませ、水分補給とおやつによる栄養補給。次は「３．３㎞先のコンビニだね」「そこで朝食かな」と新たな目標を決めて、また出発。

午前７時頃、班ごとにコンビニや公園等で朝食を済ませた。宮川を渡ると赤福の幟や伊勢神宮の案内標識も増え、商店など町の賑わいも増し伊勢神宮の雰囲気が色濃くなる。大きな森が現れた、やっと外宮（１７㎞付近）に到着。まだ、観光客も少なく、朝の優しい光が差し込みひっそりとした荘厳な雰囲気。参拝の前に俗世の穢れを払うため手水舎で手と口を清めた。正宮では、まず無事に到着できたことに対する感謝を捧げ、その後に願い祈った。

宿泊地の修養団までは、外宮から残り４㎞弱。いよいよ、目的地として修養団をタブレット端末に入力した。太陽の光も強くなり、気温は、どんどん上昇を始めた。ラスト４㎞は、この暑さが大きな壁となった。

「おかげ横丁に着いたら、赤福氷食べたいなぁ」「お昼ご飯は何を食べようかな」楽しみな伊勢散策を話題にして、ゴールへのモチベーションを高めた。到着時刻に大きな差が出たが、全員がお昼過ぎまでに無事修養団にゴールすることができた。

午後からは、伊勢神宮内宮への参拝とおかげ横丁散策を行った。家族へのおみやげの購入・昼食・食べ歩きなどを仲間と行い、楽しいひとときを過ごした。

夕食は、「食事コンテスト」と題して、提供された食材でどんなメニューを考えて作ることができるかを競った。「えー、これだけの材料で作るの」「難しいなぁ」「豚肉は生姜焼きにしない？」「はんぺいで団子を作ろうよ」「カレーのルーが余っていたから、カレースープにしようよ」このキャンプでは、最後の夕食づくり。知恵を絞り、調理に取りかかった。どの班も手際よくあっという間に料理は完成した。全ての班の試食をしたが、どの班も工夫されていて本当においしかった。鍋で炊くご飯の味も素晴らしかった。水加減や火加減を間違えておこげを作った初日が懐かしく感じた。

夜は、大広間で「大川柳大会」を行った。秀逸な作品には、座布団がプレゼントされ、チーム対抗で座布団の獲得枚数を競った。

「夏なのに 夜空に輝く オリオン座」
「夜の道 励ましながら 歩く道」
「夏なのに 冷たく感じる 夜の風」

職員やボランティアも川柳を発表し、「うまい！座布団３枚」とさながら「笑点」のように盛り上がった。1日目の緊張のためお通夜の様な静かな終わりの会が嘘のようであった。自作の川柳を生き生きと発表する姿に、子どもたちの大きな成長を感じた。

８月２３日（金）【７日目】

いよいよ最終目的地である二見海岸の海を目指す。残り１２㎞である。

午前４時３０分、修養団の玄関で中学生６名が車座になっている。「こんなに早くから何事だ」と思い、少し離れたところから様子を伺う。「やっぱり、歩くのが遅い子にペースを合わせて、全員そろってゴールするべきだよ」「でも到着が遅くなるとお昼ご飯を食べる時間やおみやげを買う時間が無くなるからぁ・・・」「どこかで判断しなければいけないこともあるよな」各班のリーダー（中学生）が集まって、最終日の歩き方について相談をしていた。こんなにも真剣に仲間のことを考えていることに深い感銘を受けた。また、自分たちで解決しようという班のリーダー（中学生）のたくましさを誇りに思った。

午前６時に出発のつどいを行い、「さあ！行くぞ」と気合いを入れたところで、雨がポツリ。雷雲が急接近。雷雲が去るまで、1 時間待機。その間、班ごとに最終歩行に向けた最後の作戦タイムとなった。

午前７時、小雨の中、合羽を着用していよいよゴールの二見海岸を目指してスタート。暑くはないので、歩くペースは順調だ。おかげ横丁を横目に見ながら、五十鈴川沿いに海を目指す。道を間違えて遠回りをする班もあったが、順調に歩行を進めた。どの班も和気あいあいと夜に行うキャンプファイアーの出し物の相談などをしながら歩いた。雨は、降り止まず靴は完全に浸水状態。途中からは、水たまりの中も臆することなく突き進む姿も。「あと１㎞ 位歩けば、海岸線に出るね」「よし、がんばろう」空はどんより厚い雨雲に包まれ、体は疲れ切っているが、心は澄み切った快晴状態だった。

「あっ、あの幟のあがった所が神社だね」「ゴールが見えたよ」海岸線に出ると、数キロ先まで見渡すことができる。ゴールまであと２㎞弱、さらに足取りは軽くなり、気分も高まった。「もうすぐ１００㎞ のゴー

ルだ」笑みを浮かべ喜びを噛みしめながら、一歩一歩ゴールへ向かった。

正午、先頭の班が二見興玉神社に到着、後続の班も次々にゴールした。全員が、１００㎞を歩き切ることができた。拝殿で、旅の無事のお礼を伝えた。自然の家へ向かう帰りのバスの中では、ほぼ全員が熟睡していた。

午後４時過ぎに「ただいま」と元気に自然の家に帰ってきた。５日前に自然の家を出発したことがずっと昔のことのようにも感じられるし、昨日のことのようにも感じた。いろいろなことが起こり、濃密な時を過ごしたので時間の感覚が麻痺している。

午後７時からキャンドルファイアーを行った。ボランティアリーダーが面白おかしく進行した。班の出し物として、クイズやゲーム、歌、ダンスなどが発表されてとても盛り上がり、各班の結束も感じられた。

最後の夜ということもあり、就寝まで名残惜しく仲間との交流を深めた。

８月２４日（土）【８日目】

８日間の疲れを全く感じさせないほど、全員が元気に最終日の朝を迎えた。

午前中は、一週間利用してきた寝袋やマットを干したり、鍋や食器などの道具を片付けたりした。その後のグループ TIME では、８日間の活動を振り返った。がんばれたことがんばれなかったこと、冬に向けてさらにがんばりたいことを仲間と語り合った。

午後１時からの終わりの会では、班の代表が川柳を発表した。そして、真冬にチャレンジまで、約５ヶ月それぞれの場所で目標を持って過ごし、さらに成長した姿で再会することを約束して別れた。

６．まとめ

長いようで、短かった８日間のチャレンジ。いろんな困難や苦しみを乗り越えながら、全員が「１００km を歩く」という目標を達成できたことは、子どもたち一人一人の大きな自信になった。

「年下に教えるのは疲れた。指導とか・・・。でもとても楽しかった。自分も高１になったらボランティアになりたい」（中学１年生男子）、「今年は、ちょっと難しい夢冒険だった。これからは、年齢の高い参加者同士でミーティング的なことをする時間がほしい」（中学２年生男子）、「参加者の自主性を求められるようになり、中学生同士で最後の方は話し合えたのはよかったけど、中学生にストレスがたまった」（中学３年生女子）

本年度は、参加者の主体性をより高めることをキャンプの大きなねらいに据えたので、このような感想が中学生に多く見受けられた。ボランティアリーダーは、班のリーダー（参加者）を育てることに主眼をおいたので、日を追うごとに班のリーダーが中心となって、歩き方や食事のメニューなどを相談して、自主的に活動できるようになった。班のリーダーは、どんな声掛けをしたら低学年がついてきてくれるか、班がまとまるか悩むことも多かったが、この一週間で大きく成長をすることができた。小学５年生から中学３年生という参加者の学年の幅が広いこの事業では、中学生には、小学生をリードしてリーダーシップを学ぶという狙いがあるべきだと改めて感じた。このことは、自己形成期にある中学生にとってとても貴重な経験であると思う。また、このキャンプの「曽爾（山）から二見（海）まで１００㎞を歩いた」という現実が形として残ることは、子どもたちの自己肯定感にも大きく影響すると考える。

閉会式では、多くの参加者が目に涙を浮かべ、仲間との別れを惜しみ、同時に冬にお互いに成長した姿を見せあうことを約束した。

次は、真冬にチャレンジ！子どもたちの冒険は現在進行形である。

（主任企画指導専門職　田中　耕司）

令和元年度教育事業　夢冒険
真冬にチャレンジ～一歩から広がる『∞』の可能性～

２．ねらい

・日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感や喜びを感じとらせ、自己肯定感を高めさせる。
・基本的生活習慣の確立や規範意識を高めさせる。
・異年齢での集団行動を通じて、仲間と協力する気持ちを培わせる。
・基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で生きるために必要な知識・技能を養い、主体的に考えて状況把握をし、危機管理できる能力を身につけさせる。
・自然の雄大さやすばらしさに気づき、視野を広げさせる。

２．実施日

令和２年１月１１日(土)～１月１３日(月・祝) ２泊３日

３．対象者

小学校５・６年生、中学生
※「真夏にチャレンジ」に参加した者

４．参加者 ／ 募集定員

２４名／２４名　(真夏にチャレンジ参加者)

５．プログラム（要約）

「一歩から広がる『∞』の可能性」をテーマに、「真夏にチャレンジ」での経験を活かし、冬の自然の素晴らしさや厳しさを体験し、そこにある「自然」「人」「歴史」に触れ、仲間とともに、冬の三峰山登山、極寒でのテント泊など様々なチャレンジを重ねた。

夏のキャンプを振り返るグループタイム、仲間と相談して材料を購入して作ったオリジナル鍋、冬山登山、キャンドルファイアー、テント泊、焚き火などの活動を通して、曽爾周辺の大自然にふれると共に、自分や仲間と向き合った。

また、夏の経験や自信が活きるように、プログラムの中で、仲間と共に協力する場面、自分自身の力を発揮する場面を設け、自分自身で考え行動できるようにした。

スケジュール

１月１１日（土）
≪夏からの振り返り、集結≫
鍋材料の買い物
夢冒険タイム
（冬山へ向けて、クッカーの練習、アイゼンの装着）
テント設営
夕食作り（オリジナル鍋を作ろう）
焚き火を囲んで
グループタイム～夏からを振り返って～
テント泊

１月１２日（日）
≪冬の大自然・新たな挑戦≫
三峰山登山
キャンドルファイアー
グループタイム～家族からの手紙～

１月１３日（月・祝）
≪明日へのチャレンジへつなぐ≫
テント撤収
亀山登山（亀山から叫ぼう）
物品の片づけ
グループタイム～明日へのチャレンジ～

１月１１日（土）【１日目】

「真夏にチャレンジ」から約５ヶ月、夏のチャレンジを共に過ごした仲間全員が近鉄榛原駅で再会した。

最寄りのスーパーマーケットに移動して、まず、夕食の鍋作りについて相談をした。各自が書き出した「鍋メモ」をもとに、最初は少し緊張しながらも次第に和気藹々と相談する雰囲気になっていった。年長の中学生がリーダーとなり話し合いを進めた。売り場を見ながら決めようという班は、電卓を片手にすぐに食品売り場に向かった。「白菜は、どの位いるかな？」「この団子半額だよ。今晩食べるから大丈夫だね。これにしよう。」「焚き火で焼き芋もしようよ。」などと話し合いをしながら、売り場を約１時間動き回った。どの班も一人当たり５００円の予算で鍋の具材、飲み物、デザートなど上手に買い物をした。「おいしい鍋を作ろう」という目的のもとに買い物を一緒にすることが絶好のアイスブレイクとなって、５ヶ月間のブランクも埋まったように感じた。

自然の家に到着してから、開会式、夢冒険の歌の練習、オリエンテーションを行った後、はつらつ広場での班活動が始まった。

テントの設営後、鍋作りに取りかかった。洗い場など水場が遠い悪条件にも関わらず、どの班も手際よく調理を進めた。夏の経験が活かされていると感じた。鍋作りと並行して、班毎に焚き火を楽しんだ。お餅を焼いたり、焼マシュマロや焼き芋を楽しんだりした。焚き火や鍋を囲みながらの食事は、話もはずみ素敵な時間となった。また、自分たちで選んだ食材ということもあり、残食もなく、きれいに食べ切ることができた。

グループタイムでは、夏からの活動を振り返り、この５ヶ月間、各々にがんばったこと・成長したこと、逆にがんばれなかったことなども発表し合い、それを基に、この３日間の自分の目標、班の目標、約束事を考えた。

夜は、氷点下のなか、寝袋に包まりなかまと肩を寄せ合ってテントで寝た。

１月１２日（日）【２日目】

午前５時３０分、参加者はテントから出て活動を始めた。薄明の中で寝袋を片付け、朝食の準備を行った。はつらつ広場で焚き火を囲みながらおにぎり、スープの朝食をとった。午前７時の出発のつどいでは、参加者による司会進行のもと「体操」「夢冒険の歌」「めあての発表」「円陣」を行った後、バスに乗り込み三峰山に向けて出発した。

午前８時、みつえ青少年旅行村を班ごとに出発。不動の滝までは緩やかな林道だが、休憩のたびに汗をかかないように上着を脱ぐなどして体温調節をした。不動の滝を過ぎるときつい登り坂が続く。「がんばろう。」「山頂まで残り２４００mだよ。」と声を掛け合い、励まし合いながら各班のペースで山頂を目指した。昼前に山小屋に到着した。山小屋から上は、風が強まり、寒さが増すので、そこで防寒着をしっかり着用して頂上を目指した。三畝峠を過ぎると、今までの杉木立の景色から一変して、視界が開け天然林の美しい景色に変わった。「雪だ！」と歓声が上がった。また、登山者とすれ違うことも増え、「こんにちは。」と、元気に挨拶する場面も増えた。八丁平では、雄大な景色を眺めながら、クッカーでお湯を沸かしてカップ麺を食べた。

帰りのルートは、山の尾根沿いを進み、全員が快調に足を進めた。予定していた時間よりも１時間ほど早く全ての班がゴールすることができた。ゴール地点ではご褒美のお汁粉でお腹を満たした後、お亀の湯でゆっくり体を温めてから自然の家へ戻った。

夕食後のグループタイムで班毎にキャンドルファイアーの出し物の最終練習を行い、キャンドルファイアーに臨んだ。全員が踊って歌って最後の夜を楽しんだ。参加者の顔には終始笑顔が溢れていた。キャンドルファイアー後のグループタイムで、参加者は保護者からの手紙を読んだ。心のこもった手紙に、全員が胸を熱くした。

１月１３日（月・祝）【３日目】

最終日の朝、「来たときよりも美しく」を合い言葉に宿泊棟やテントの片付けなどを主体的に行った。はつらつ広場でカートンドックの朝食後、亀山登山を行った。亀山山頂から自分の思いを大声で叫んでみたり自然の家周辺の眺望を楽しんだりした。

昼食の煮込みうどんをはつらつ広場で食べた後、最後のグループタイムの時間に、３日間の活動を振り返り、これからチャレンジしたいことを班の仲間と語り合った。そして、閉会式に臨んだ。

６．まとめ

はつらつ広場でのテント泊と焚き火を囲んでの鍋料理、八丁平で苦労してお湯を沸かして食べたカップ麺の味、三峰山山頂からの絶景。どれも一生忘れることのできない思い出となっただろう。そして、それを共有した仲間との出会いも一生の宝物である。

夏の活動でつけた「自信」が、この冬の活動でさらに自分を見つめ直し、新たな「自信」をつけ加えて「確信」に変わった。この「確信」をもとに参加者が今後さらなる活躍・飛躍をすることを願っている。

（主任企画指導専門職　田中　耕司